

## 教育委員会関係事業における平成 29 年度の評価及び平成 30 年度の方途

坂祝町では平成 28 年度から目指すまちの将来像を「暮らしたい 訪れたい 魅力あふれるまち さかほぎ」として掲げ、住民と協働しながらまちづくりを推進する「坂祝町第 6 次総合計画」がスタートしました。5 年間をかけて社会の潮流やまちを取り囲む動きを踏まえ、「小さなまち」としての利点を活かし、住民との協働の継続や一人一人がまちとの関わりをもつことで、ゆるぎない地域生活の土台を築くことを目指しているところです。とりわけ教育においては「坂祝町第 6 次総合計画」で掲げる目標「豊かな心が育つまちづくり」に基づいた「坂祝町教育大綱」の実現に向けて、地域とのつながりを活かしながら確かな実践に取り組んでいます。そしていよいよ平成 30 年度は折り返しとなる年です。

これまでの 2 年間の結果を踏まえ、点検項目ごとに掲げた平成 30 年度の目標達成に向けて以下の通り報告します。

### 【評価及び評価基準】

- ・ 3 段階評価 (A・B・C)
- ・ 評価基準は点検項目ごとに設定

### 【教育課】

「坂祝町第 6 次総合計画」を基本とした坂祝町教育夢プランの「さかほぎいきいきプラン (坂祝町教育大綱)」による各種教育活動は、これまでの成果を踏まえた「豊かな心を持ち、自ら実践するたくましい坂祝の子」の育成を願い、平成 29 年度も園・学校と家庭、地域が連携し「自立と共生」をキーワードとして進めてきました。

平成 30 年度は、坂祝町のよさを生かした保育園・こども園・幼稚園・小学校・中学校の連携と「生きる力」を育む教育の一層の推進を図るとともに教育委員会による指導・支援、教職員研修の実施、子どもたちの安全確保の推進や安心安全な教育環境の整備等を行っていきます。

### I 教育委員会の活動

#### (1) 教育委員会会議の運営と改善

点検項目	H28	A B C : 評価基準 → : H29 年度の結果を踏まえた所見 ⇒ : H30 年度 改善に向けた具体的な方途
	H29	
	H30	
	H31	
①教育委員会会議の回数と効率化 (定例会 12 回、臨時会 3 回)	B	A : 当初の予定通りに開催し、内容を充実し、効率よく行うことができた。
	A	B : 当初の予定通りに開催できた。
		C : 見通しを持った開催、運営ができなかった。
		→定例会は当初の予定通りの開催回数であったが、臨時会は 2 回であった。 理由は教育長職務代理者の指名のために開催するところを、前回の定例会にて継続の意思確認ができたからである。 ⇒会議の回数を減らすことだけでなく、協議が必要な案件とそうでないものを見極めて 1 つの議案について話し合うための十分な時間を確保していく。

②教育委員会会議の運営の工夫	C	A：資料の先渡しをしたことで、活発な討議ができた。 B：資料の先渡しを確実に行うことができた。
	B	C：資料の先渡しが十分にできなかった。 →教育委員への資料の先渡しは確実にできたものの、開催日直前に配布したことがあった。
		⇒先渡しすることが会議当日の話し合いが活発になるほどではなかったの で、そうなるようにするためにはどうしたらよいか検討する。

### (2) 教育委員会会議の公開、並びに保護者や地域住民への情報発信

①教育委員会会議の公開の工夫	B	A：広報「さかほぎ」以外でも開催日等の広報活動を行った。 B：広報「さかほぎ」にて開催日を周知した。
	B	C：広報活動を何も行わなかった。 →毎月、確実に教育委員会会議の内容と次回の開催予定日時を掲載した。 ⇒より効果的な告知方法を模索しつつ、広報「さかほぎ」「かわら版メール」 掲載と役場玄関告示場にて確実に周知する。
②会議録の情報発信	B	A：委員会開催月の広報「さかほぎ」で周知した。
	B	B：委員会開催翌月の広報「さかほぎ」で周知した。 C：公開できるように準備できなかった。 →広報「さかほぎ」での周知が十分にはできていたとは言えない。 ⇒H30年度は広報「さかほぎ」への掲載内容の充実を図る。

### (3) 教育委員会と事務局との連携

教育委員会と事務局との意見交換会の実施	B	A：意見交換で明確になったことを協議し、地域の教育施設等に伝達することができた。
	B	B：定例教育委員会だけでなく、普段から積極的な意見交換を行った。 C：定例教育委員会のみでしか意見交換が行えなかった。 →園・学校行事、町の行事等で積極的な意見交換ができた。 ⇒園・学校の改善につながる情報を定例教育委員会はもちろん、普段から積極的に意見交換を行っていく。

### (4) 教育委員会と首長との連携

教育委員会と首長との意見交換会の実施	B	A：具体的な方策まで協議し、実践したことを形として示すことができた。 B：具体的な意見を通して、積極的な協議ができた。
	B	C：具体的な意見交流ができなかった。 →総合教育会議を2回開催した。校長、園長が参加することで、学校・園の状況を共有することができた。 ⇒H30も校長、園長が参加し、情報共有するとともに園・学校の課題や改善に向けて踏み込んだ協議を図る。

(5) 教育委員の自己研鑽

①研修への参加状況	B	A：研修会で学んだことを、その後の教育委員会に活かすことができた。 B：研修会で学んだことを共有した。 C：研修会に参加できなかった。
	B	→飛騨市古川町で開催された市町村教育委員会連合会研究総会（11月）に参加した。関市教育委員会が実践している夢プランの6つの実践と、岐阜市教育委員会が実践している科学的根拠を基にした企業連携における教育を学ぶことができた。
		⇒平成30年度の研究総会は、平成31年度コミュニティ・スクールのスタートに向け、坂祝町の教育に参考にできそうなことは何かという視点をもって参加する。
②近隣市町村の園・学校で開催される公表会や発表会への参加状況	B	A：学んだことを、園・学校に伝達し活かすことができた。 B：学んだことを、園・学校へ伝達した。 C：視察に行くことができなかった。
	B	→29年度は教育委員会として可茂特別支援学校公表会（10月）に参加した。坂祝町の子どもたちも在籍しており、元気な姿を見ることができた。マンツーマンに近い形の支援により成果が表れており、支援員が一人でも増えれば手厚く支援できるという意見があった。
		⇒坂祝から通学している児童生徒と地元の児童生徒との居住地交流及び町内の行事等で積極的に関わりが持てるよう、小中学校や地域に働きかけていく。

(6) 園・学校及び教育施設に対する支援・状況整備

①坂祝幼稚園並びに坂祝小中学校への教育委員会訪問	B	A：2回以上訪問し、具体的な指導ができた。 B：2回以上訪問した。 C：1回のみ訪問した。
	B	→教育委員会としては入学式・卒業式や運動会、授業参観等の学校行事を中心に2回以上訪問した。ただし、H28年度のように教育委員会訪問として授業を参観することはなく、コミュニティ・スクール導入に向けた意見交流会を行った。
		⇒授業参観の訪問も必要だが、H31年度コミュニティ・スクール導入に向けて教職員との積極的な意見交換を行っていく。
②中央公民館や坂祝町キッズドリームワールド、町民プール等への施設訪問	B	A：多くの施設を訪問し、担当者に対して改善等の指導ができた。 B：多くの施設を訪問した。 C：挙げている施設の訪問ができなかった。
	B	→町民プールはオープン間近の視察で準備が着々と進んでいるところであった。清潔感のある環境であった。

		⇒オフシーズンにおける施設の活用方法が無いか意見が出されたが、現段階では難しい。今後の課題として、検討していく必要がある。
--	--	---

## II 教育委員会が管理・執行する事務

①学校教育又は社会教育に関する基本方針を定めること	A	A：改善に向けて十分に協議した。 B：改善に向けて数か所変更した。
	B	C：改善に向けて見直すことがなかった。 →町立幼稚園、小中学校で見直したものを教育委員会でも検討した。 ⇒平成28年度に検討を重ね坂祝町教育大綱として定めて3年目となる。 第6次総合計画も折り返しの年となるので、必要に応じて第6次総合計画の振り返りと関連付けて検討する。
②校長や園長、教員その他の教育関係職員の研修の一般方針を定めること	B	A：研修で学んだことを、園児・児童生徒の指導に活用したり職員の校務に活用したりした。
	B	B：園・学校においてICT機器を活用したり情報モラルの研修を行ったりした。 C：園・学校においてICT機器を活用することも情報モラルの研修を行うこともなかった。 →小学校は授業や校務等で積極的に活用している。園・中学校でも保護者向けも含めて研修は行っている。 ⇒指導で活用するとともに職員研修やケース会議、支援の検証等の活用も含め、幅広い活用法について調査・工夫していくことが必要である。
③教科内容及びその取り扱いの一般方針を決定すること	B	A：学校評価の3項目のすべてがAであった。 B：学校評価の3項目にB又はCがあった。
	B	C：学校評価の3項目にDがあった。 →平成28年度の学校評価の結果より、やや下がった。 ⇒新学習指導要領の完全実施を見据え、知識・理解の質を高め、資質能力を育む「主体的・対話的で深い学び」のある授業づくりの推進を図る。

## III 教育委員会が教育長に管理・執行を委任する事務

[園・学校教育関係]

1 「豊かさ・確かさ・たくましさ」があふれる坂祝町の教育の推進について
(1) ①②③及び(2) ①における評価基準の文中「A」「B又はC」「D」とは、幼稚園、小中学校の職員による4段階(A～D)による自己評価のことである。幼稚園、小中学校職員による自己評価の基準は以下の通りである。
A 十分達成できたと考えられる。      B おおむね達成できたと考えられる。
C もう少し努力が必要と考えられる。      D かなり努力が必要と考えられる。

1 「豊かさ・確かさ・たくましさ」があふれる坂祝町の教育の推進について

(1) 幼小中連携のもとで、一人一人に「生きる力」をはぐくむ教育の推進

①〔豊かさ（徳）〕 豊かな人間性や社会性の育成	B	A：園・小中学校のすべての職員がAと回答した。 B：園・小中学校でB又はCと回答した職員がいた。
	B	C：園・小中学校でDと回答した職員がいた。 →概ね普段の指導に「豊かさ（徳）」を意識しているとともに、その達成を感じている。若干、意識しているものの十分に手応えを感じていない職員がいる。
		⇒子どもたちが仲間と関わることを通して、人間性や社会性を高めていくような活動を仕組んでいく。
②〔確かさ（知）〕 自ら学び自ら考え基礎基本を着実に身につける力の育成	B	A：園・小中学校のすべての職員がAと回答した。 B：園・小中学校でB又はCと回答した職員がいた。
	B	C：園・小中学校でDと回答した職員がいた。 →子どもたちに考えさせることを大切にした活動を意図的に仕組んでいる。
		⇒与えられた課題にはまじめに取り組んでいる子どもたちが多い。主体的に学ぼうとする姿には手応えを感じていない。子どもたちに主体的に考えさせるような指導を継続する。
③〔たくましさ（体）〕 一人一人の自己実現に生きてはたらく資質や能力の育成	B	A：園・小中学校のすべての職員がAと回答した。 B：園・小中学校でB又はCと回答した職員がいた。
	B	C：園・小中学校でDと回答した職員がいた。 →概ね「たくましさ（体）」を意識しているとともに、その達成を感じているが、学年が上がるにつれて弱さを感じている職員もいる。
		⇒心身たくましく育てることはまさに生きる原動力を培うことである。体育や部活動とともに園学校生活の諸活動においても自分の体の健康・くじけない心の育成に取り組む。

(2) 幼稚園、小学校、中学校の教育目標が一人一人の姿に具現される幼稚園・学校経営について

①明るく魅力ある園・学校の経営方針の実施と見届け	B	A：園・学校評価6項目（一部管理職が回答）ですべての職員がAと回答した。
	B	B：園・学校評価6項目（一部管理職が回答）でB又はCと回答した職員がいた。
		C：園・学校評価6項目（一部管理職が回答）でDと回答した職員がいた。 →平成28年度の学校評価の結果より、やや下がった。
		⇒平成29年度は坂祝町に初めて管理職として赴任してきたり異動してきたりした職員が多かったため、平成30年は坂祝町の教育を十分に理解して園・学校運営を行う。

②ふるさと教育とキャリア教育の推進	A	A：園・学校のすべての学年で行った。
	B	B：園・学校の一部の学年で行った。 C：園・学校で行わないところがあった。
		→教科を問わず地域を知ったり地域で学ぶことを大切にしている。
		⇒すべての学年においてふるさと教育を実践していくとともに、学年や集団の実態に応じた取り組みの工夫を大切にしていく。
③園・学校の説明責任と資質向上	B	A：園・学校は評議員の意見を参考にして様々な改善をした。 B：園・学校は評議員の意見を参考にして改善を図ろうとした。
	B	C：園・学校は評議員の意見を活かさなかった。
		→評議員訪問で交わされた意見を園・学校経営に反映させることができている。
		⇒評議員のすべての意見を取り入れることは難しいが、これからも地域の方の意見を大切にしながら、園・学校経営の充実を図る。
④園・学校における施設と設備の整備と充実	B	A：計画に基づく更新・整備を行うとともに、突発的な整備についても対応した。
	A	B：計画に基づく更新・整備を確実に実施した。
		C：更新・整備を行わなかった。
		→H29年度、耐力度調査等の調査を行った。 ⇒H30年度以降、小中学校に関しては「学校施設長寿命化計画実施計画」を策定。幼稚園に関しては、長寿命化計画を策定し、どの施設においても延命化とライフサイクルコストの削減を図ることを目的とした更新・整備を行う。
⑤園・学校の事故・防犯対策と坂祝町地域学校安全サポートチームの充実	A	A：サポートチームボランティア会員数を増やすことができた。
	B	B：サポートチームボランティア会員数の増減がなかった。 C：サポートチームボランティア会員数が少なくなった。
		→H28年度会員58人からH29年度会員数40人と会員数が減っている。(会員の確認が出来ていなかったため、活動していない人も会員扱いとしていた。) 実質活動している方が把握できていない。また、会員となっていない方も活動している場合がある。
		⇒H30年度よりサポートチームボランティア会員に保険をかける関係で調査し、活動している方を把握し、教育委員会とサポートチームの連携を図る。

## 2 学校給食センター

①安全でおいしい学校給食の提供	B	A：保護者・園・学校からの除去対応もれの指摘を1食も受けない。
	A	B：保護者・園・学校からの除去対応もれの指摘を5食未満受けた。 C：保護者・園・学校からの除去対応もれの指摘を5食以上受けた。
		→保護者・学校から対象食材の指摘もなく、各セッションでの点検の徹底を確認できた。新規者、継続者も面談を実施し、日常生活での様子を把握し、認識・情報を共有し今後の食育の充実につながった。 ⇒今後も安全でおいしい給食提供と食育の推進を図っていく。
②食に関する指導の充実	A	A：「我が家の朝ごはん」「図書献立」の月1回実施と、95%以上の資料提供ができた。
	A	B：資料提供が80%以上、95%未満であった。 C：資料提供が80%未満であった。
		→「我が家の朝ごはん」など、食の重要性を啓発し、給食時間での放送資料提供を毎月実施し、「食に関する指導」の充実が図れた。 ⇒「我が家の朝ごはん」の給食再現の実施だけでなく、魅力的な朝ごはんの紹介も行い、食文化やマナー給食の復活も視野に入れ、充実させていく。
③安全管理と衛生管理の徹底	B	A：指示書に従い100%完全な衛生的作業を確認した。 B：指示書に反した不完全な衛生的作業を10%未満だが確認した。
	B	C：指示書に反した不完全な衛生的作業を10%以上確認した。 →調理員の衛生管理等の共通理解は充実しており堅実である。現場作業における衛生面での指摘・指導が必要な場面もあるが、相互理解のもと徹底していく。老朽設備の更新も進んでいる。
		⇒調理指示書を基本に、作業動線図・作業工程表に従い衛生的な作業の実施と点検確認を行う。心臓部にあたるボイラー更新が財政面で先送りとなり不安を払拭できないが、日々の点検により延命を図る。

〔社会教育〕

坂祝町の社会教育は町民憲章の基本方針を踏まえ、生きがいのある生活を積極的に創り出すため、住民の意欲に応じた生涯学習やスポーツ、文化活動の機会や場を提供し、生涯にわたり心豊かに暮らすことができる環境を目指していきます。

また、教育夢プラン「さかほぎ いきいきプラン」の具現に当たり、家庭・地域の教育力の充実を図り、自らが主体的に取り組み、参加する生涯学習の「まち」を推進していきます。

1 坂祝町における生涯学習（さかほぎいきいきプラン）の振興

生涯学習推進体制の確立の充実	C	A：受講者の内、町内受講者数が5割以上 B：受講者の内、町内受講者数が4割以上
	C	C：受講者の内、町内受講者数が4割未満 →町内の受講者が4割未満であるが、それぞれのニーズに合った講座を選び、加茂圏域の方々と触れ合いながら楽しく講座を開催することができた。
		⇒公民館講座とマイセルフ講座の内容のバランスを考え、町民に興味を持ってもらえる生涯学習にしていきたい。来年度も子ども講座は先行予約で抽選にし、町内の方が申込みやすい方法で行いたい。

2 生涯学習の推進と内容の充実

①家庭教育(乳幼児期を除く)	C	A：参加率100% B：参加率70%以上
	C	C：参加率70%未満 →村上淳子先生（どくしょ塾主宰）による合同家庭教育学級講演会の参加率は高くなかった。しかし、読書の効果について少しでも多くの人に周知するため、講演会の内容を一枚のプリントにまとめ、町内の園・学校の保護者に配布した。
		⇒「学び」のある内容の講演会を目指して講師の選定を行っているが、学習として捉えられるような内容だと参加者が伸びない。周知の方法も含め、保護者が積極的に学びたいと思うような方法を考える。
②青少年教育	B	A：昨年とは異なった工夫や改善を図った。 B：活動を行っている。 C：活動を行っていない。
	A	→青少年育成町民会議のサブテーマを「大人が変われば、子どもも変わる」から「元気なあいさつが広がる町を目指して」に変更し、町民会議全体であいさつ活動に力を入れてきました。各部会も方針に沿って活動を行いました。
		⇒青少年育成町民会議の体制の見直しを行い、各部会で新たな事業を計画

		していく。
③成人教育	A	A：定員の8割以上の受講があり、サークル・ボランティア活動に繋げることができた。
	B	B：定員の8割未満の受講だった。
		C：定員の6割未満の受講だった。
		→まなびいかも丸講座は前年度より受講生が減ったが、他の成人学級については前年並みの参加があった。講座の内容によってはサークル活動に繋げることができている。 ⇒県・町の行政や企業とも連携を深め、問題や課題に結び付けられる内容の講座にしていく。
④高齢者教育	A	A：70人程の受講があり、自ら学ぶ姿勢を作ることができた。
	A	B：50人程の受講があった。
		C：定員の半分にも満たなかった。
		→69人の受講生があり前向きに課題に取り組むことができた。親睦会も開くことができ、楽しく仲良く学ぶことができた。 ⇒引き続き魅力ある課題・学習にして、自ら学ぶ姿勢を大切にしていきたい。

### 3 公民館活動の充実

①公民館行事や内容の充実	A	A：各事業への参加者が前年を上回り、新しい企画も増え、より盛況に開催できた。
	B	B：各事業への参加者が前年並みであった。
		C：各事業への参加が前年より少なくなった。
		→恒例の事業への参加はなかなか増えない状況。公民館まつりにおいて新しい企画を取り入れ、マンネリ化しないよう企画した。 ⇒新規の参加者の掘り起しのため、町民から町民への呼びかけ方法を考えていきたい。チラシの配布の方法も工夫していく。
②施設や設備の充実	C	A：計画どおりにできた。
		B：来年度に向けて計画できた。
	C	C：計画が進んでいない。 →30年が経過し、補修が必要な部分がでてきた。トイレの改修については、一年でも早く行いたい。調理室の機器は充実してきている。 ⇒予算の必要な改修についてはなかなか難しい。早めに気づいたところか

		ら少しずつ修繕していく。長寿命化計画の早期作成が必要である。
④人権教育の推進	A	A：来場者が200人以上であった。 B：来場者が200人未満であった。
	C	C：来場者が150人未満であった。
		→今年度は、中学生の作文発表、パネルディスカッションなど人権について考える時間も設定でき大変良い内容の講演会であったが、来場者は約100人程度であった。
		⇒大変良い内容なので、チラシの配布方法や声掛けなど工夫し来場者を増やしていく。

#### 4 生涯スポーツの推進

①スポーツ活動の推進	C	A：スポ推主導によるスポーツ教室を実施した。 B：スポ推でスポーツ教室を実施するための話し合い等を実施し、教室開催に向けた準備を行い、開催日程まで決めることができた。
	A	C：スポ推でスポーツ教室を実施するための話し合い等を実施したが、具体的な内容にまでは至らなかった。
		→子ども会活動で軽スポーツ教室を2つの単位子ども会で実施することができた。坂祝スポーツクラブからの要請で子ども遊ぶ塾を実施し、軽スポーツの講師となり普及ができた。
		⇒総合型地域スポーツクラブとスポーツ推進委員の協力体制の更なる強化を図る。
②体育施設の有効活用	B	A：社会体育・教育施設利用率80%以上 B：会議室を除き利用率80%未満
	A	C：会議室を除き利用率64%以下
		→2月末現在で、東西館会議室、中学校野球場を除き、稼働率80.5%となった。
		⇒施設利用者が増加しているため、申請、使用料の支払い等事務量が増大している。スポーツ少年団、体協などの活動が充実するよう施設調整を図る。
③各種団体の指導・育成	B	A：指導者向けの研修会を実施した。
	B	B：年に1回以上団体登録・施設利用説明会を実施した。 C：団体登録・施設利用説明会の参加団体が80%以下だった。
		→新規登録説明会を3回実施し、登録団体の増加を図った。
		⇒施設の使用等において、グラウンド整備方法や備品の使用方法等が複雑な団体もあるため、今後指導を行っていく。

## 5 文化の推進

### (1) 文化活動の推進

①文化振興の推進	A	A：定期的に事業を開催できた。年10回以上
	A	B：事業を開催できた。年5回から9回
		C：事業の開催が4回以下で、参加者も少なかった。
		→タウンコンサート年2回、映画鑑賞会年1回、町民ギャラリー12回実施した。 ⇒多くの町民の方が集まるような催し物を企画、工夫を行う。
②文化団体の育成	B	A：各部会の人数が増えた。
	B	B：各部会の人数が変わらなかった。
		C：各部会の人数、部会の数が減った。
		→H27年は会員90人、H28年は会員93人、H29年は会員97人と増加年2回、PR活動としてチラシを配布し会員を募集する。体験教室を開催するなど会員増に努力した。 ⇒公民館でサークル活動をしている団体にも、声掛けを行って会員増加を図る。
③文化施設や資料館の活用	A	A：多世代に郷土資料館を活用してもらえた。
	B	B：昨年並みの利用だった。
		C：来館者が減った。
		→公民館ホールは企業の利用など増えている。郷土資料館は夏休み講座や小学校の授業などで利用があった。一般の来館者は少ない。郷土資料登録のデータ化を進めている中、ボランティアの来館者がずい分あった。 ⇒郷土資料のデータ化を完了させ、データと現物資料を結び付け利用を図っていく。

### (2) 文化財の保護と活用

①埋蔵文化財の発掘調査や保存と活用	B	A：発掘調査を県の指導・協議の上迅速に行うことができた。
	B	B：発掘調査はなかったが、土器・石器の展示を工夫した。
		C：発掘調査も展示もできなかった。 →県の指導を受け試掘調査を行った。土器・石器は2階のロビーに展示している。

		⇒引き続き県の指導を受けながら調査を進めていく。
②文化財や郷土芸能等の伝承と保護	B	A：企画講座に多数の受講者があり、更に小学生が町の文化財に興味関心をもつことができた。
	A	B：企画講座に受講者があり、更に小学生に町の文化財を周知することができた。 C：企画講座に受講者があった。
		→文化財とスポーツに触れる講座を引き続き行った。定住自立圏事業として歴史マンガの発刊と講座を行い、歴史講談・ハイキングを企画した。そして名古屋圏での講座も行った。小学校6年生対象に歴史講談授業を開催。夏休み講座や小学校の授業で郷土資料館を利用する機会を作った。
		⇒一般向けの文化財関係の講座を企画していきたい。子ども達にも文化財や郷土芸能に触れる機会を増やしていく。
③ふるさと教育の推進	B	A：町民講師の台帳登録を作成し、派遣ができた。 B：町民講師の派遣ができた。
	B	C：町民講師の派遣依頼があったが、派遣できなかった。
		→小学校3年生が「昔のくらし」の学習で郷土資料館を見学し郷土史研究会員に説明してもらった。小学校6年生の「ふるさと学習」として、うとう峠と一里塚について、また中学校伝統文化を学ぶ会等についても町民講師を派遣することができた。
		⇒依頼があった時に、派遣できる体制を整える。

## 6 図書館

①室内の環境整備と蔵書の充実	B	A：蔵書の充実と共に、除籍本の選定や閉架庫へ本を移動し、閲覧しやすい環境状態となった。
	A	B：蔵書の充実を図った。 C：蔵書の充実が図れなかった。
		→蔵書の充実を図ると共に本の除籍を行った。蔵書が増え、本があふれてしまったが、除籍することにより書架が閲覧しやすくなってきた。児童文学も作者順に並び替え、まとまりができた。
		⇒レファレンスしやすい環境を作り、親しみやすい図書室にする。書架は請求番号の細かい所まで分類順にし、閲覧しやすくする。
②利用者へのサービスの充実	B	A：サービスの周知を図ったことで、前年度より年間貸出数が増加した。 B：サービスの周知を図ったが、前年度と概ね同じ年間貸出数であった。
	B	C：サービスの周知を図ったが、前年度より年間貸出数が減少した。
		→少し増えたが、概ね同じ年間貸し出し数であった。前半は貸し出し冊数が大幅に伸びたが、後半はほとんどかわらなかった。

		⇒寒くなると利用者も少なくなるので、秋の読書週間に行う行事を考えていく。
③読書活動サークル・ボランティアの育成	A	A：サークル・ボランティアの活動への支援により、新メンバーが加入したり、活発な活動が行われたりした。
	A	B：サークル・ボランティアの活動の支援ができた。 C：サークル・ボランティアの活動の支援ができなかった。
		→オレンジママに新メンバーが加入し、活動も軌道に乗っている。掲示物「オレンジの木」も作り直し、広くPRできた。
		⇒学校行事と調整しながら、来年度も3本立て(朝読書、お昼のわくわくタイム、図書の時間)で行っていく。
④子どもの読書活動推進計画の実施	B	A：アンケートの実施と結果の公開ができ、更に、前年度の結果より、各家庭での読み聞かせの充実が図れた結果となった。
	B	B：アンケートの実施と結果の公開ができ、「Open Book」を発行した。 C：アンケートが実施できなく、「Open Book」を発行しなかった。
		→アンケートの実施と結果の公開ができ「Open Book」の発行ができた。
		⇒アンケートを数年にわたり行い、年度ごとの推移もできるようになったので、その学年にあった読書活動を推進していく。

## 7 子ども会活動の推進

子ども会活動の推進	A	A：調整により参加人数が増えた。
	B	B：調整したが、昨年と人数が変わらなかった。 C：調整できなかった。
		→ふれあい交流会において、他の行事と重なり、参加人数が減少した。 ⇒他の行事と重ならないように予定を組む。子どもが興味を示してもらえるような種目を増やし、マンネリ化を防ぐため、一定数の種目変更を行う。

### 〔こども課〕

こども課は、教育と福祉を複合させて、次の5つの柱を重点施策として取り組んでいます。

平成29年度は「坂祝町子ども・子育て支援事業計画」実施の3年目であり、計画に沿った各種事業を推進しました。

地域子育て支援拠点事業（つどいの広場アンブレラ）や親子療育通園事業・地域療育支援事業（つくんこ教室）の利用が増えており、プログラムの工夫や移動して他施設を利用するなどして、ニーズに対応しています。

放課後子ども総合プランで、放課後子ども教室推進事業と放課後児童健全育成事業（子どもクラブ）を連携して行っています。

### 1 放課後子どもプラン（子ども教室・子どもクラブ）の推進

①事業内容の充実	A	A：プログラムに参加する子どもの数が増えた。 B：プログラムに参加する子どもの数が同じくらいであった。
	A	C：プログラムに参加する子どもの数が少なくなった。
		→H28は延べ1344名参加。H29は延べ1440名参加。2月末時点で昨年度より延べ96名増加した。
		⇒遊々こども園の定員増と、子どもクラブからの参加が定着してきたため、人数増につながった。満足度が伴うように実施していく。
②地域や他の諸機関との連携	A	A：参加する先生を増やすことができた。 B：参加する先生が同じであった。
	A	C：参加する先生が少なくなった。
		→H29年度は6団体に新しく講師として来ていただいた。
		⇒町内のボランティア団体・サークル団体・町民講座に声掛けを行う。

### 2 乳幼児期子どもプランの推進

①乳幼児期家庭教育学級の運営に関すること	B	A：毎回のアンケートを実施し、満足度90～100%を達成できた。 B：満足度80%を達成できた。
	B	C：満足度が下がった。
		→アンケートの結果より満足度は目標達成に近づけた。しかし、講座の内容によっては出席率が下がったような印象を受けた。
		⇒講座内容のマンネリ化が懸念される。しかし、基本的に守っていく講座（食育・しつけ・よみきかせ）は必ず取り入れ、さらに充実した学習内容を目指す。
②つどいの広場（アンブレラ）の運営に関すること	B	A：イベントや講座を開催し、子育て世代だけでなく多世代との交流ができた。
	B	B：イベントや講座を開催し、子育て世代の交流ができた。 C：イベントや講座の開催ができなかった。
		→H28年度より、子育て世代を対象としたイベントや講座を開催し、子育て世代の交流の場としてのカタチができてきた。
		⇒まずはイベントや講座が定着することを目標とする。その中で内容を見直しながら、多世代が交流できるカタチを目指す。

### 3 地域療育支援事業の推進

①地域療育支援事業の推進	B	A：各所で理解が深まり具体的な支援や動きにつながった。 B：支援内容や対象児について各所で共通理解できた。
	B	C：会議だけで留まってしまった。 →支援児については共通理解を促しながら、具体的な支援や動きに繋がった所があるが、療育体制については各所での理解や動きが繋がりにくかった。
		⇒正職が1人しかおらず厳しい面もあるが、人材を育てていく。つくんこ教室だけで担うのではなく、全体で考えていけるように役割分担していく。
②親子療育通園事業に関する事	B	A：保護者が利用しやすい療育施設について、基本構想に位置づけることができた。
	B	B：療育しやすい環境づくりについて、基本構想に位置づけることができた。
		C：基本構想に位置づけることができなかった。 →療育しやすい環境作りについて、基本構想に位置づけることができた。また、人材の重要性を伝えることができた。
		⇒こども課の中で療育事業の見直しや必要な機能を確認していく。トイレについては、すでに改修計画が立っており、工事に入る予定である。